

48 特別講演・北海道に分布するサンショウウオ2種の生態と保全

におこなわれている。

キタサンショウウオの越冬場所は、低層湿原ではミズゴケ丘堆やサイクリングロード脇に植栽された樹木の根元付近など乾燥した場所だった。越冬場所から出てきた個体は、繁殖水域へ直線的に移動する傾向が墜落わな調査で確認された。この時期に移動する1日あたりの距離は、雄では5.50m、雌では10.12mで、雌の方が繁殖水域へ急ぐ傾向がみられた。移動は日没後およそ1時間経過した頃に始まり、午後11時頃にその日の移動が終わる。繁殖水域に入った個体は主に夜間に繁殖行動をおこない、雄は雌が水中に現れる1時間ほど前に姿を現す。繁殖行動のパターンはエゾサンショウウオと基本的に同じで、午後7時以降に始まり真夜中に終わる。繁殖期のピーク頃は早朝までおこなわれる。卵や幼生の天敵は、ヒメゲンゴロウ、ゲンゴロウモドキ、イバラトミヨ、エ

ゾホトケ、トビケラ幼虫などである。繁殖に参加する個体の年齢は、雄は5~7歳、雌は4~9歳で、雄の繁殖開始年齢は3~5(平均4.4)歳、雌は3~6(平均4.1)歳だった。非繁殖期の8月の胃内容物を見ると、個体によってばらつきはあるが、本種の生息地に分布するコウチュウ目、ダニ目、クモ目、ワラジムシ目、半翅目、トビムシ目、ハエ目、基眼目(巻き貝)、ザトウムシ目に分類される小動物だった。本種は、有尾両生類の中で最も寒冷地に適応し、北アジアの広範囲に分布するが、釧路湿原での分布域は本種の世界的分布域の東南端に位置する。のことから、生息環境や繁殖環境の悪化によって「釧路個体群」が絶滅する危険性が考えられる。たとえばシベリアの中央部であれば、一部の個体群が絶滅したとしても、周囲の個体群が流入することによって回復は可能であるが、釧路湿原のような分布辺縁域では回復は非常に難しくなる。

大会発表およびポスター発表要旨

1.野幌森林公園で確認されたアライグマによる在来両生類の捕食(予報)

堀 繁久(北海道開拓記念館)

堀・水島(2002)は、「野幌森林公園の両生類について」で野幌森林公園の両生類相を記録し、ツチガエルの侵入とアライグマによるエゾサンショウウオの捕食の可能性を報告した。しかし、アライグマの捕食に関しては状況証拠での推測であり、その確認が課題として残されていた。

2012年春、アライグマが在来両生類の捕食現場を確認するために、赤外線の動画記録のできる自動撮影カメラによる調査を実施した。それにより映像記録によるアライグマの在来両生類の捕食状況があきらかになった。捕食の際、エゾサンショウウオに関しては、両手を器用につかって少しずつ食いちぎるように時間をかけて食い、最後に尾部を残した。それに対し、エゾアカガエルの方は、頭から丸のみして食う場面が記録された。アライグマは水中に手を突っ込

んで、餌となる生き物を手探りで探して捕食していることが明らかになった。

他の捕食者ができない水中の両生類の探索・捕獲手法ができるため、産卵に集まる両生類の繁殖個体への捕食圧がかなり大きく影響してきているものと推定される。今後、アライグマによる捕食の影響についてさらに調査していくたいと考えている。

2. エゾサンショウウオの分布状況

佐藤孝則(天理大学おやまと研究所)

エゾサンショウウオの分布を2万5千分の1の地形図で示すと、241区画内(全体の26.3%)で繁殖場所を確認した。本種は3つのサイズの個体群に分けられ、頭胴長で比較すると、小型サイズは 58.6 ± 0.63 mm(平均±標準誤差)、標準サイズは 68.3 ± 0.36 mm、大型サイズは 79.9 ± 0.49 mmで、各サイズ間で有意な差が認められた。小型サイズの個体は佐呂間町、斜里町、音更町、池田町、白老町、豊浦町で、標準サイズは釧

路市,陸別町,本別町,帶広市など広い地域で,大型サイズは北見山地の下川町,大雪山系のヒサゴ沼,五色ヶ原,鹿追町の山中のはか,日高山系では七つ沼,清水町,新得町,十勝清水町,芽室町,帶広市,中札内村など日高山麓の東側一帯で確認された。また,標高3mから標高1,870mにいたるまでの広範囲に分布していた。これは繁殖水域が確保されれば,標高差に関係なくどこにでも生息・分布が可能であることを示している。

本種は止水性サンショウウオとされているが,繁殖水域の流速が5cm/秒以上の水域を「流水域」,5cm/秒未満を「静水域」,0cm/秒の水域を「止水域」と定義して解析すると,流水域での繁殖場所は全体の10%,静水域は44%,止水域は47%だった。これは,本種は完全な止水性を好むのではなく,少し流れのある水域でも繁殖することが示唆された。本種の卵嚢は無色透明の被膜でできているが,全体が乳白色の卵嚢が道北の上川郡下川町と中川郡中川町で確認された。この地域一帯に分布する本種の個体群に特徴的だと考える。

3. 旭川市近郊でみられる国内外来種アズマヒキガエルの分布状況と防除活動の取り組み

斎藤和範(旭川大学地域研)・青田貴之(旭川市)・八谷和彦(道拓殖短大)・中川裕樹(道拓殖短大)・ざりがに探偵団ビッキー(鷹栖町)
2007~2012年にかけて,旭川市神居古潭から石狩川上流方向の旭川市街地,下流方向の深川市・妹背牛町・秩父別町・滝川市,砂川市,江別市まで,内大部川上流方向の芦別市まで,春~初冬にかけて広域分布調査を行った。またこれら範囲で4月末~5月において産卵池調査を行った。

防除活動は,旭川市富沢・台場東・神居地区の産卵池において(各地区1箇所ずつ),毎年5月から6月初めに,毎日日没後2~3時間程度たも網及び徒手によって成体及び卵塊を駆除,夏~秋には数日ずつ,日没後2時間程度,富沢地区の産卵池周辺及びカムイの杜公園において,亜成体・若齢個体を駆除した。

分布は,初めて斎藤らによって報告された1995年当時と比べ分布は拡大し,調査地全域および札幌市や石狩市で確認,産卵池もこれら地域で多数確認された。上流域への分布拡大は,人為的な成体・卵塊の運搬・放逐や自然分散が考えられるが拡大速度は遅い。下流域へは石狩川による流下が確認され,急速に分布が拡大。また,農業用幹線水路により,北空知頭首工から空知幹線・深川幹線,神竜頭首工から北幹線などで,滝川市・秩父別町・妹背牛町の水田地帯に分布が急速に拡大。

防除は旭川市富沢・台場東・神居・神居古潭で行っており,産卵期に産卵池周辺に行うのが効果的。分布拡大防止には,産卵池の消失,高密度域における社会教育や普及啓発看板などによる周知だけでなく,学校教育における外来種学習が緊急に必要である。

4. ニホントカゲの名前の変遷(北海道版)

徳田龍弘(ばいかだ WILD-PHOTO)

ニホントカゲとされてきたトカゲは,Okamoto & Hikida (2012)により,東日本産の個体群は新種ヒガシニホントカゲに分類された。それに伴い,北海道産のニホントカゲとされてきた集団もヒガシニホントカゲとなった。また,ここ10年間における「ニホントカゲ」の学名等が,同定の混乱などにより変遷していることも説明した。北海道のヒガシニホントカゲの名称の変遷は以下のとおり。

2000年頃ニホントカゲ(*Eumeces latiscutatus*)→
2003年・ニホントカゲ(*Eumeces japonicus*)→
2005年・ニホントカゲ(*Plestiodon japonicus*)→
2012年・ヒガシニホントカゲ(*Plestiodon finitimus*)

※当発表は発表者の研究ではなく,発表者が最近のトピックスとしてこの件をまとめてレクチャーしたものである。

4. 北海道に侵入したトノサマガエルについて

高井孝太郎(北海道立総合研究機構)

トノサマガエルは本来,関東地方と仙台平野を除く本州,四国,九州,国外では韓国,中国,極東ロシアに分布しているが,近年,北海道への侵入が確認され